

不良少女の愛は突然

作——秋野あきえ

不良少女の愛は突然。

——なんてことを言っていた友達が、最近バンドを組んだという報告を受けて、久しぶりに彼女に会いに行くことにした。

「久しぶりだね」

「そんなに、変わってないでしょ、私」

「貴女はね。私なんか全然パンクスだからね」

「あはは、なに、それ！」

私、佳奈恵と、沙夜子の縁は深い。

1

彼女とは、中学時代からの付き合い。髪はショートカット、制服はカッコよく着崩すので、第一印象は「やたらサバサバしている子」。レンズの大きな丸眼鏡におさげ、制服は乱さない、いわゆる根暗でガリ勉タイプの私とは真逆に思えた。

そんな彼女は意外にも、口を開けばトンデモ少女で、帰りに突然曇り空を指差して「もうすぐあの空から宇宙船が落ちてくる」とか、体育の授業のときには「予知能力が私に言った。あのハードルで転んだら死んじゃうから。絶対に走りきる」とか、よくわからない発言に関しては学年一、いや校内一トップレベルで、いちいち周囲を困らせていた。

最初は笑わせようとしてわざとやっているのかと思っていただけ

ど、「なんで私の主張を否定するのかわからない。一個人の思想だよ？」と、どうやら本気で言っているらしいと知ったときからクラスを取り巻くはとうとう彼女に寄り付かなくなり、結果、最初に目をつけられた私が、彼女の面倒をみるようになったのだ。彼女曰く、これは今最先端流行の、『原田美希の物真似』らしいが、私にはさっぱりわからなかった。

——それは夏祭りの夜。軽く頬にキスをされ、沙夜子に告白された。私の十五の誕生日だった。

風が吹いていた。新しい始まりを告げるように。

今まで男友達とはよくつるんでいたが、それらには全く恋愛感情を抱くことはなかった。この時、初めて気づいたのだ。私が、女の子しか愛せないことに。

彼女とは特別大きな進展もなく、ただゆっくりと一緒にいた（お互いまだ中学生ということもあった）。

永遠と続くと思った時間も過ぎ、いよいよ中学の卒業式が迫っていた。彼女とは高校入試の話すらまともにしたことがなかった。話そうとしないならしないで、影でこっそり頑張っているのだろうと思っていたが、なにしろ彼女のことだ。本当に何の対策もしていないなんてパターンは十分ありえる。不安になり放課後担任教師に彼女のことを聞くと、黙って首を振るばかりで、「そのことは言うな」と念押しされているようだった。

そんな彼女が、バンドを始めたなんて。

楽器はリコーダーすらまともにやりながらなかった彼女のことだから、きつとたいしたことはない、アマチュアバンドには変わりはないだろうけど、少なくとも私は期待していた。彼女と付き合いの途